
木の葉の平和な意志

早業たぼ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

木の葉の平和な意志

【Nコード】

N9763W

【作者名】

早業たぼ

【あらすじ】

ある男の人が、ナルトの世界に飛ばされてしまいました。

飛ばされた先では、前世の記憶は一切ありません。

つまり、ある男 としてのアイデンティティーは消滅しています。

3代目火影の孫として生まれた、少年が、

何かから貰ったとんでもない才能と力を使って、成長していきます。

緊迫した戦いは、あまり無いかもしれません。

木の葉に生誕（前書き）

ところどころ、原作と異なる部分があります。

このお話では、木の葉丸くんは存在していない設定です。

また、キャラクターの性格が明らかだったりします。

木の葉に生誕

「っていうわけで、君は輪廻転生の輪から外れちゃったんだ」

自分の置かれた状況を理解するのになかなかの時間がかかりました。

この、目の前の、**っ**白い光**っ**が言うには、

- ・雷に打たれてアボン（天候が悪かった事は、覚えていきます）
- ・魂が死に対して強く抵抗した為、輪廻転生の輪からはじかれた。
- ・**っ**白い光**っ**に気に入られた。

「そうそう、良く理解できました。

さあ、何でもいいよ、好きなだけ、欲しい能力を言ってくれ。

あ、飛ばせる世界は君の知ってる世界だけだから」

きつとこの**っ**白い光**っ**に顔があつたら、

m9)・(・ビシッ!!! こんな感じなんだろうと思います。

前の世界、つまり生きてきた人生に、

全く悔いが無いかと言われたら、肯定は出来ないけど、

最強の力を貰って違う世界の覇者になるなんて、

絶対このまま普通に生きていても体験できないでしょう。

「では遠慮無くいわせて・・・」やっぱやめた「」

「えっ」

「やっぱり能力は自分で発見していく方が楽しいよね！
とりあえずその世界で死にはしない能力あげるから！
あと、これ特別ルールね！
記憶消しとく！」

「つて事で、楽しんでおいで！」

「えっ」

「白い光」が強く輝きました。
それを見ていると、意識が吸い込まれていったんです。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

そこは、木の葉のとある病院。

「おぎゃ ああああ！！」

一人の男の子が、生をうけました。

それから起こりました。

木の葉の里の人には、忘れる事のできない、九尾の襲来が。

- * - * - * - * - * - * - * - * -

僕、猿飛ポルは、

3代目火影、猿飛ヒルゼンの孫です。

この木の葉の里の人は、

僕のおじいちゃんと、ナルトという子の事を、愛しています。

うずまきナルト。

僕は、ナルト君と年が一緒です。

いつも明るくて、バカ騒ぎしてるナルト君とは、
忍者アカデミーでもいつも一緒に行動するほど、仲良しです。

そんなナルト君は、火影の孫である僕よりも、有名です。

ちょうど、僕が生まれた年に、ここ、木の葉の里を、
とんでもない化け物が襲ったそうです。

その時、この里を救ったのが、ナルトと、ナルトのお父さん。
ナルトのお父さんは、4代目火影でした。

彼は、自らの命と引き換えに、化け物、九尾の狐を、ナルト君に封
じ込めたのです。

つまり、ナルト君は里を救ったヒーローです。

親を亡くしたナルト君が小さい頃には、みんなが、彼を、

よろこんで世話をしました。

おじいちゃんは、ナルトを、僕と一緒に、実の孫のように、英才教育をしました。

もしもナルトが里の人に嫌われても・・・とかなんとか言ってたけど、ナルト君は里の人からとっても好かれています。

僕だって、里の人、みんなに挨拶はしてもらえます。

でもナルト君みたいに、通りすぎるだけでお菓子とかもらえません・

ちょっと、ずるいです。

おじいちゃんは良く言います。

「ボル、おまえはおそらくこの世界で誰よりも優れた忍者になる。好きなように、生きなさい。」

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

わしは、この木の葉の国を愛しておる。

この里の者、みな、愛しておる。

でも。

・・・孫が一番可愛いのじゃ。

ああ、早くアカデミーから帰ってこないかのう、ボルや。

ああ、早く遊びにこないかのう、ナルトや。

しかし、可愛いだけでは無いのがあの二人なのじゃ。

プロフェッサーや、忍の神と謳われたわしをも、

凌ぐかもしれん、いや必ずわしを抜いていくであろう。

ナルトは、全く勉強が出来なくせに、
チャクラの性質など、しっかりと感覚で理解しておる。

ボルは、もうわしの全てじゃ。

わしの孫して、ボルあり。

いや、ボルあつてのわしなのかもしれん、

とにかく孫バカといわれようが、なんだろうが、ボルはわしの全てじゃ。

7

そしてその才能たるや、比べられる者は居ない。

あのうちはイタチでさえ、ボルと比べれば霞んでしまう。

わしの術の、9割はもう覚えてしまっているのかもしれんや。

ああ、可愛い孫や。

これは、わしの勝手な憶測、いや希望かもしれんのじゃが。

ボルは、あの、伝説とされた、

輪廻眼を開眼しているのかもしれん。

あれは、幼い子供の疑問だった。

土遁の術と、火遁の術を混ぜたらどうなるの？

そんな、ただ、幼い子供の疑問だった。

・・・その発想に辿り付ける事が既に天才なのかもしれないや。

それはのう、血継限界というものがあつての。

そこから説明をして、つまるところ、出来ないという話しをした。

だが、そのとき、ボルは、わしの前で、軽々と、やってのけた。

その時、目の中に同土円状に広がった模様があつた

・・・ような気がした。

覗き込んでみたが、その時はもう普通の茶色がかつた瞳だった。

そして、そのチャクラ量は、もう異常としかいいようがない。

ナルトは、あの九尾が腹にいて、それを飼いならしているのだから、そのバカげたチャクラ量は理解する事が出来る。

しかし、ボル。可愛い孫や。

あやつのチャクラは、計り知れない。

無限なのかもしれない。

それに関しては、少し恐怖すら覚えるぐらいじゃ。

実力だけを見れば、もう中忍、いや、上忍を任じても良いのじゃが、それはあの子の情操教育を考えて、

周りの子・・・いや、せめてナルトと一緒に成長させてあげたい。

・・・ああ、可愛い孫に早く会いたい。

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「おい！ゼン！早く来いってばよ！」

「さっきまでナルト君が待たせてたじゃないかあ・・・」

今、僕達は忍者アカデミーに居ます。

ちょうど、ラーメン一樂にむかうところです。

そこは、ナルト君の行き着け中の行き着けなんです。

僕も何度も連れていかれました。

「そのラーメンを食べる間にも、勉強・・・」

「ぐっ・・・それは言うなってばよ・・・」

ナルト君は、全く勉強が出来ない子です。

それはもう本当に。

ただ、僕達の学年で、ナルト君に体術で勝てる人は居ません。
うちの天才児って言われている、サスケ君でも。

あ。

僕が居ました。えへへ。

また、忍術も、ナルト君は、サスケ君の次に優秀です。
勿論、忍術は僕が一番ですけど。

チャクラというものがあります。

ナルト君は、その体に宿る、九尾の力を使う事が出来ます。

しかし、僕は、訳の分からない「何か」のチャクラを使えます。

火影であるおじいちゃんにきいても、それは何か分からないそうです。

ただ、ぼんやりと、「白い光」なのだそうです。
さっぱりです。

ずずずつと小気味の良い音をたてて、麺が口に吸い込まれる。

ナルト君から教えてもらった、このお店は、本当に美味しいです。
ただ、調子に乗って頼みすぎて、

残した時は・・・ただ、恐ろしかったと、言っておきます。

「ところで、今日は何をするってばよ？」

「ナルト君の家で遊ぼう」

ナルト君は、今は一人暮らしをしています。

家にいつも知らないお兄さん、おじさん達が居る僕からは、

とても羨ましいです。

木の葉に生誕（後書き）

やってしまいました。

最強小説。

感想お待ちしています

光人間・・・だと!?

「ナルトくん、あの、あのね」「ナルトくうーん!」「」「
大人しげな、見てると少しもどかしい思いにも駆られる、
そんな女の子が、

ナルトに話し掛けようとする、
女の子の集団がナルトを囲んでしまいました。

ナルト君は女の子にモテます。

ふわふわの金髪、人を元気にさせる、笑顔、底なしの明るさ。

サスケ君も、モテます。

彼を一言で表すなら、クール!

でも、そのクールの中にたまに人恋しさみたいな、
そんな感情が見えます。嫌いになれません。

僕は・・・どうでしょう。

かっこいいって言われたいです。

可愛いとしか、女の子は言いません。

「はー、めんどくせー」

そういうのは、シカマル君です。

女の子にモテないのが、少し悔しいのでしょうか?

あれ、なんだか、チラチラと、いのさんを見えますね。

・・・ふふ、そういう事ですか。

「いのさん」

そう声をかけると、ナルトを囲ってた女の子の集団から、一人出てきました。

「な、なによ」

少し顔を赤くしながら、返事をしてくれました。

「シカマル君が、幼馴染のいのさんに恋をしてしまった。つて漏らしてました!!」

そう言っつて、僕は、トイレに行つて来ますと言つて教室を後にしました。

「くくくくえーっ!!!!」「くくく」

「ちょ、ちが、いや、ちがくね・・・めんどくせえ!!!!」

ふふふ、どうぞお幸せに。

-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*-*

「おつ、ナルトにボルちゃん。

今日はアカデミーの卒業試験なんだつてな!

これでも食つて頑張れよ!」

そう言つて、お菓子屋の主人は、おだんごをくれました。

「おっ、可愛いボルちゃん、ナルト！
今日の果物は新鮮だぞ〜！！」
そう言っつて、果物屋の主人は、りんごをくれました。

「おっ、・・・」

・
・
・

もう、おなかいっぱいです。

今日は、忍者アカデミーの、卒業試験です。
これに受ければ、下忍になれます！！

少し、ときどきしています。

ここは、アカデミーの試験用の教室。
目の前にはイルカ先生がいます。
ミズキっていう男の先生は、先ほど暗部の方に連れていかれました。
何かあったのかな？

卒業試験は、分身の術です。

チャクラを練り、印を結び、

「分身の術！」

綺麗な分身が、右隣に出現しました。

先生は、にっこりと笑ってくれました。

「猿飛ボル、おめでとう。」

これでアカデミーは卒業だ」

なんだか、少し目に汗が出てきました。
あれっ、どうしてだろう。

イルカ先生の、暖かい笑顔は、人の心も暖めてくれます。
僕はこの先生が大好きです。

少し、先生を驚かせたくなってしまいました。

影分身の術をしました。

僕がこの高等忍術を出来る事は、知っていたようで、
特に驚いたようではありませんでした。

ふふ、まだまだ終わりませんよ！

それを、流すチャクラの性質を変えて、

火遁の分身、

水遁の分身（水分身の術）

風遁の分身、

土遁の分身、（岩分身の術）

雷遁の分身、（雷遁影分身の術）

を一斉に産み出しました！

今思えば、どうして素直に分身の術をしたただけで、いや、せめてここでやめておかなかったのか。自分の愚行を呪います。

この時点で、イルカ先生は引いていました。

ほんの実験の程度の気持ちで、僕は間違いを犯してしまいました。3つの性質変化を一度に合わせる技術、塵遁というそうです。後で、おじいちゃんが嬉しそうに話してくれました。を、行ってしまいました。

イルカ先生は、それが何か分かっていないようで、ただ、とても驚いていました。

その、常人ではありえない術の連続は、意図的ではないものの、イルカ先生から、ある上忍の先生に伝わり、そして奴の耳に入ってしまったのです。

ひとまず、僕とナルトはアカデミーを卒業しました。

ナルトは、影分身を大量に・・・多重影分身の術をして、これまたイルカ先生に驚かれました。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

「それは、誠か？」

「はい、確かでございます

確かに、3つの性質変化をしておりました。」

会話をしているのは、

木ノ葉の暗部養成部門「根」の創設者でありリーダー、「忍の闇」の代名詞を持つ男、ダンゾウと、その手下。

「そんなバカな・・・。

ヒルゼンの孫がのう・・・、

木の葉の発展の障害になりうるかもしれん。

ヒルゼンには悪いが、消えてもらおう。」

輪廻眼なんてない

そんなふうを考えていた時期が

彼にもありました。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

それは、アカデミーを卒業した次の日の事でした。

僕は、特にようもなく、

サスケの家（彼もまた一人暮らし）に遊びにいった、
その帰り道でした。

本物の殺意を持った、手練れの忍が、

あつというまに、10人程現れて、あまりの出来事に戸惑っている

僕に、

後ろの一人が手刀をいれ、僕は気を失いました。

どれだけ才能があつて、それが開花していようと、
経験と、人数の差がありました。

それに、まさか木の葉の中で襲われるなんて思つていませんでした。
。

僕は気付くと、暗い部屋にいました。
体は完全に固定されています。

「おまえが、ヒルゼンの孫か」

僕は答えません。

「本当に3つの性質をあわせる事ができるのか？
そつだとしたら、何故、できる？」

あれがまずかつたのかっ！今更になつて僕は気付きました。
そつといえは、

授業で、性質の合わせは、
そもそも血継限界があつた上で、2種類が限界だ。
というのを、学んだ気がします。いえ、学びました。

ああ、なんて愚かな事をしたんだろう、時は既に遅しでした。
現に僕はもう指先も動かす事はできません。

おじいちゃんも助けに来てくれることはないでしょう。
そもそも知らないはず。

とつと始末しろ、そう先ほどの声の者が言つと、
男の一人がクナイを振り上げました。

様々な事が頭に浮かんできました。

おじいちゃん。ナルト。

サスケにシカマルにキバに・・・いのにちようじに・・・
ああ、もっと生きたかった。

クナイが、振り下ろされた。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

訳が分からなかった、

俺は、確かにクナイを振り上げ、それをこの子に振り落とした。

確かに、この子を殺すのは忍びとしても忍びねえ。

・・・かとん！ギャグ滑り緩和の術！

しかし、俺は、精鋭中の精鋭。

クナイを、一方的に動けない相手に外すなんてことは、ありえない。

だが、

だが。

俺が刺したそこに、傷跡はなかった。

刺した感触も、なかった。

あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！

おれは奴を刺したと

思ったらやつは血の一滴も出さなかった。

な… 何を言っているのか わからねーと思うが
おれも 何をされたのか わからなかった…

頭がどうにかなりそうだった… 催眠術だとか超スピードだとか
そんなチャチなもんじゃあ 断じてねえ
もつと恐ろしいものの片鱗を 味わったぜ…

- * - * - * - * - * - * - * - * -

クナイが振り下ろされました…。

ん…？

痛みが、こない。

そういえば、今まで痛いと思ったのは、
じいちゃんとナルトの突っ込み… NANDEYANENだけでした。

刺された時に、何か不思議な感じが体中に駆け巡りました。
その不思議な感覚に身を任せました。

すると、何故だかその能力の事がしつかりと頭の中に入ってきて、なおかつそれを口に出さなければならぬ、そんな気持ちになりました。

「僕は・・・」

自然系悪魔の実「ピカピカの実」の能力者の光人間！！！！体を光に変え！！、光速での移動！！・攻撃！！が可能である！！！！」

「くくくくえつくくくく」

「えつ」

この体中を留めてる、いくら力を入れても、外側から切らないと抜け出せない不思議な植物でさえ、光になれば抜け出せる気がしたので、光になるイメージをしました。

どんな強力な術を使ってる時よりも、強い、そんな快感が体中に駆け巡り、気付いたら、その部屋の片隅に、僕は立っていました。

驚きで固まっている男達をよそに、本能のままに、右手から光の剣を作り出し、左手の、親指と人さし指で作った輪から、光の弾丸を発射し、

振った左手は、僕の左側に居た人たちを肉片に変えました。

打ち出された光の弾丸は、右側に居た人たちを肉片に変えました。

「一体・・・何が起こるんです・・・」

そして、扉が勢い良く開いた。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

「火影様!!」

先ほどの暗部が、慌てながら部屋に入ってきた。

「どうした？」

「ボル様が！何者かに攫われました!!」

体中がカツと熱くなった。

久しく忘れていた感情、これは、怒り。

わしの可愛い孫を・・・よくも・・・。

忍の神と言われたわしの力、見せ付けてやるっぞ・・・

「わしが、出る」

「火影様自ら・・・？」

はい、分かりました!!どうやら、うちはこの子供の家から、帰宅途中に攫われたと思われます!!」

火影であるわしが、久し振りに忍装束に身を包み、自ら搜索を始めた。

サスケの家から、家（火影、ボルの）までの道に、水が点々とたれていた。

ボルや・漏らした・ペロツ・いや、これは水遁の水。ボルのチャクラの味がする。

さすが、優秀な忍じゃ。しっかりと手がかりを残していくとは。しかし、それぐらいに気付かないような忍びが、わしの孫を連れ去る事が出来るのかのう・・・？いや、ここは木の葉のド真ん中。時間を掛ければ他の忍が掛けつける。そう考えて焦っていたのだから。

水滴を辿り、少し里から離れたところにある廃屋までついた。わしは、腹心の部下3人と共にいる。

さすがに、敵の数が数倍にでもなるか、はたまた、かつての教え子、大蛇丸が居ない限り、何の心配も無いだろう。

実戦を退いてからの、ブランクへの恐れが頭によぎったが、かつての戦い以上の、激しい術で攻防をし合う、ボルとの鍛錬を思い出し、振り捨てた。

指と目で合図し、突入した。

- * - * - * - * - * - * - * - * -

入ってきたのは、おじいちゃんでした。

思わず緊張の糸が緩んで、その場に座り込んでしまいました。

おじいちゃんは、

一瞬、部屋を見渡し、顔がひきつっていましたが、
無言で僕の頭を撫でてくれました。

でも、言わねばなりません。

「おじいちゃん、僕、あの・・・

僕は・・・

自然系悪魔の実「ピカピカの実」の能力者の光人間！！！！体を光に変え！！、光速での移動！！・攻撃！！が可能である！！！！」

おじいちゃんと、部屋を調べていた3人の暗部の人達も、

パツと振り返り、僕を見つめた。

「あはは・・・別に変な薬飲まされてないよ・・・」

そう言って、まだ固まってる4人を尻目に、

僕は、体を光に変えて、おじいちゃん、暗部、

瞬きする間にみんなの後ろに回り込んで、肩を叩いていった。

そして、元の位置に戻る。

「何がなんだか分からないんだけど！
光になれんの！」

4人は貧血気味になった。

こうして、火影の孫、拉致事件は、
当人の活躍によって、解決した。

また、肉片と化していたのが、
木の葉の裏のボス、ダンゾウと分かり、
里のトップ達は、一時騒然となった。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

第7班！

- * - * - * - * - * - * - * - * - * - * - * - * -
「はあ・・・」

は、いかんいかん。
里のトップであるわしが、ため息などについては・・・
しかし・・・のう・・・。

長らく生きているが、
光人間なんて、聞いた事もない。

何かの血継限界だろうか？
いや、あれはわしの孫。

輪廻眼を目覚めさせた事が関係しているのじゃろっか？

ともかく、可愛いわしの孫が、
里の内部で襲われる事になるとはのう・・・。
しかし、ダンゾウよ・・・。

正義も裏返せば悪という事を失念していたようじゃのう・・・。

ともかく、光人間というのを、ボウと一緒に調べてみるかのう。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * - * - * - * -

ちゅんちゅんと、小鳥の歌声で、僕は気持ちよく目を覚ましました。

昨日の今日なのに、全く何の抵抗もなく、すんなりと眠りに落ちました。

我ながら、自分の太い肝にあっばれです。

「おじいちゃんおはよー」

里のトップである火影さまも、家の中では、

唯の、僕のおじいちゃんです。

「おお、おはよう、可愛いボルや」

満面の笑みで挨拶を返してくれる、おじいちゃん。

んんん？

おじいちゃんが僕の事を凄く可愛がってくれてるのはわかっていたけど、

ここまで露骨に示すのには・・・
あ。

「おじいちゃん、光人間の研究は、下忍の額巻きを貰ってからね！」

そういうと、ばれたか、って顔をして苦笑いするおじいちゃん。

今日は、おとといアカデミーを合格したので、

アカデミー生から、下忍に、じよぶちえんじしに行きます。

昨日の事を少し考えます。

木の葉の里の裏のボスから、あまりにもおかしな才能、

いや、才能・・・ではないのかもしれないね。

3つの性質変化をするというのは、忍の歴史でも、二人だけ、とさ
れていました。

でも、僕は、7つ、全ての、チャクラの性質を
混ぜ合わせる事が出来ます。

どうしてだか、僕にも良く分かりません。

おじいちゃんの言う、僕のチャクラの源、
「白い光」に
関係しているのかもしれないね。

そして、それは輪廻眼というのが関係しているそうです。

「そーれ、輪廻眼!!」

ふざけ半分で、目に力を入れてみました。

町行く人から白い目で見られました。あ、白眼じゃないです。

ぬ、ぬぬぬ？

動体視力がとんでもなく跳ね上がった気がする・・・。

それに、チャクラの流れが・・・見える。

これは・・・写輪眼??

あれ、でもあれはうちは一族の・・・。

手鏡で、自分の瞳を確認すると、

なんだか、同土円状に模様が広がっていました。

写輪眼ではないようです、これが輪廻眼??

といっても、何が出来るのかなんて、分からないや。

後でおじいちゃんに聞いてみることにします。

そして、一番気になっているのが、光人間。

昨日は、刺されたのに、何も無いように、貫通しました。

光にものは刺せない。って事でいいんでしょうか。

昨日の通り、光になったイメージをしてみます。
チャクラを消費しているような感覚はなく、光へと変わりました。

昨日、本能のままに光の剣を出しましたが、光が固形になるって・
どうなっているんでしょうか。

ともかく、今はアカデミーに向かうとします。

折角光人間になったのですから、能力をフル活用しました。

それは、もう、一瞬でした。

気付けば、アカデミーの入り口にいて、

そして、気付いたら輪廻眼を発動させていました。

やはり、動体視力も跳ね上げないと、

光の状態での移動は無理のようです。

といっても、輪廻目も、僕のチャクラはほとんど消費してない・
しているのですが、ちっとも減らないので、へっちゃらです。

「お、ボル、おはようだってばよー!!」

「おはよー」

もう、合格した人達のほとんどが来ていました。

「あ、サスケ君」。昨日大変だったんだよ、帰り道にさあ・・」

そこまで言い掛けると、

イルカ先生が微笑みながらも、視線を刺してきたので、口をつぐみました。

「な・・なんだよ。途中でやめんな！

・・・大丈夫なのか？」

思わず声が大きくなってしまおうサスケ君。

おしゃべりに慣れてないのでしょーね、

そして心配してくれるのも、可愛いものです。

「さ、それじゃあわかってるよな？

今から3人1組のチームを発表するぞー

呼ばれた者は3人で来てくれ」

忍者アカデミーを卒業すると、

3人1組の下忍のチーム＋上忍で、様々な任務をこなしつつ、実力をつけていく。

それが、木の葉の忍びです。

「俺はボルとがいつてばよー！」

「残念だけど、成績がバランス良くなるように設定されるから、僕らは一緒になれないと思・・

「次、第7班、うずまきナルト、猿飛ボル、うちはサスケ」

「こっつておい！！！！」

思わず3人口を揃えて突っ込んでしまいました。

「イルカ先生、どういうことだったてばよ？」
ナルト君が、素直に疑問を質問してくれました。

「それがなあ・・・、大人の事情なんだよ」
イルカ先生が、苦笑しながらそういいました。

おじいちゃん・・・。

でも、他の班を見ると、

10班、奈良家のシカマルと、山中家のいの、秋道家のチヨウジ。

8班、犬塚家のキバ、油女家のシノ、日向家のヒナタ・・・などなど。

名家は名家で固まっています。

まあこれなら納得しようと思います。

でも、成績トップ1、2、3の班なんて今までにあっただのしょうか。

「さ、おまえら、それぞれの教室へ行け」

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

第7班！（2）

- * - * - * - * - * - * - * - * -

僕達は第七班のようです。

指定された教室へ行き、担当の上忍を待ちます。

「それにしても、ボルとサスケと一緒になんて、ラッキーだってよ」
笑顔で顔をくしゃくしゃにしていう彼の言葉には、
一切の嘘がないのでしょうか。なんだか嬉しくなりました。

「ふんっ・・・べ・・・別に嫌じゃないぜ・・・っ！」

クールを気取ってる彼も、もしかしたら両手を上げて踊りたいぐらい、
嬉しいのかもしれないね。

「うん、二人とも、よろしくねー！」

勿論、僕はこの二人と一緒になれて、嬉しいですが。
ただ、下忍の任務を任せてもらえるのか、心配です。

「てかさてかさ、先生誰になるってばよ？」

「うーん、検討つかないなー」

それからも、普段から仲の良い3人のおしゃべりは止まりませんでした。

しかし、待てど、待てど。
上忍の先生は現れません。

「向こうの班、もう先生きて何処か行っただってばよー・
あ、その班も・・・」

「一体どうなってやがるっ・・・!」

「ちょっとイルカ先生に聞いてくるね」

僕はそういつて、職員室へ向かいました。

「イルカ先生、僕らの班の担当の先生が来ないんですけど」

イルカ先生は、目を泳がしている。

「あー、それはだな、うん。」

まあー、そのうち来るんじゃないかな、あはは」

これは、うちの班の先生にサボリ癖か遅刻癖があると見ていいよう
です。

「ありがとうございます」

そういつて、教室へ戻りました。

「どうだった?」

「やっぱり、うちの班の先生の単純な遅刻かもしれないや」

「そんなのアリってばよー!?!」

「まあ、もう少しだけ待ってみようよ」

その間、

この前、サスケ君の家からの帰り道に攫われた事、僕が光人間になった事を話しました。

攫われた事は、二人とも心配してくれましたが、

光人間になって見事やつけたといっても信じてくれませんでした。

これは、今度信じて貰う事にしましょう。

修行でもして・・・ふふ・・・。

そして、

先生は・・・

来ませんでした。

辺りは夕暮れ。からすの鳴き声が僕らの傷心をえぐります。

「ナルト君、サスケ君。

僕はすっかり怒りましたよ。

さすがに、就任初日に現れないなんて、

そんな事許してたまるもんですか。

火影の孫を怒らした事・・・後悔させてあげます!..!」

二人が僕を恐れながら見えています。でもそんな事は気にしません。

「すけさんかくさん・・・じゃなくて、

ナルト君、サスケ君、行きますよ!!」

そう言っつて、瞬身の術で、我が家へ向かいます。

- * - * - * - * - * - * - * -

家へ帰ると、

おじいちゃんが待っていました。

「おお、そろそろだと思っつていたのじゃ。」

思わず3人で、へッ?て顔をしてしまいました。

「アカデミーを卒業したばかりの生徒が、いきなり下忍となつて命のやり取りを出来るはずがなかつつ?。だから、アカデミーの卒業試験とは別での、下忍になるための試験があるのじゃ。」

だがのう、お前達に試験は必要ないだろうと」

「「「いや、それなら、

言っつてくれればいいと言っつものじゃろう?」

まあ、ある程度の忍耐力が忍には必要じゃろうつて。

さすがに一時間足らずも待てなかつたら、

どうしようかと思っつていたが、

そんな心配は無用だつたの、ほっほっほ」

「さて、じゃあ第7班の先生を発表するぞ。
移輪眼のカカシ、コピー忍者の異名を持つ、はたけカカシ先生じゃ。
・・といつても、今は居ないのだがのう。
明日から、君達はどんな時も、一つのチームじゃ。
頑張るのじゃよ」

写輪眼ときいて、サスケ君が少し反応したのを、
僕とおじいちゃんは見逃しませんでした。

「それと、サスケよ。
少し、話さなければならぬことがあるのじゃ
ナルトとポウは少し・ラーメンでも食べてくると良い。
わしのおごりじゃ」

「おー！じいちゃんサンキューだってばよ！」
素直によるこぶナルト君。
サスケ君の事も考えましようね。

ずずずつと、小気味の良い音をたてて、麺が口の中に吸い込まれる。
。。
あれ、なんだかデジャヴ？

「それにしても、今日は変な一日だったてばよ。
カカシ先生ってどんな人かなあ？」

その頃。火影宅。3代目とうちはサスケ。

「それは・・・どういう事なんだよ!？」

「兄さんは俺を守る為に・・・!？」

「すまん・・・本当に、すまん。」

そこまで言つて、わしは閃いた。

ダンゾウのせいにするばいいんじゃないか。

いつかあの世で謝ろう。

「木の葉の裏のボス、ダンゾウと言う男を知っているか？」

知らないのが常だと思つのだが、

そやつも、何より木の葉の平和を願っていたのじゃ。

いた・・・というのは、もうこの世に居ないということ。

そして、うちは一族のクーデターの計画を聞きつけた、

あやつは・・・。

独断で・・・。

「くそつ!!　くそつ・・・!!」

悲しみと、驚きで打ち震えるサスケの肩をそつと抱く。

「おまえも、わしの孫の一人じゃ。

泣きたい時は泣くが良い。

わしは必ず。ボウも、ナルトも、必ず、胸を貸してくれるはずじゃ。

」

しばらくサスケはわしの胸で泣いていた。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

そんなのってアリかよ・・・！

俺は、ずっと疑問に思ってたんだ。

あの優しかった兄さんが、

どうして一族を皆殺しにしなければならなかったのか。

その謎が、やっと解けた。

兄さんと母さんは、才能溢れる兄さんばかり見てたし、他の一族の奴らもそうだった。

そして、時たま宴会と称して、物騒な事を話してるのも分かっていった。

だから、兄さんは俺を守る為に一族を・・・って言葉をきいたら、もうどうでも良くなった。

兄さんを殺したい。今までそう思ってきた。

今は、兄さんに笑いかけたい・・・。

そんなこんなで、落ち着いた俺は、家へ帰ろうとした。
でも、3代目が、夜ご飯をご馳走してくれるって言う。
家に帰っても、昨日の晩御飯の残りを食べるしかない・・・。

素直に、その心遣いに甘える事にした。

俺はただ聞いているだけだったけど、色んな話をしてもらった。

兄さんが、本当に俺を思っていた事。

クーデター計画は、実行寸前で、
関係の無い木の葉の人たちも、
犠牲にさらされるところだったということ。

俺が、これからこの家に住むこと。

俺が、兄さんと同じぐらい才能に溢れているということ。

はっ!?

この家に住むってどういう事だ!?

「もう、決定じゃ。わしが決めた」
そういつて目の前ですこり笑う、3代目。

「一人じゃ寂しがるうて。
・・・といても、

ボウは静かなおまえさんの家を気に入っているようじゃがの
目に皺を寄せて語るその姿は、
忍の神というよりも、ただの孫思いのおじいちゃんに見えた。

ふと、目頭が熱くなった。

さっきあれだけ泣いたのに。

今度は何の泣かっていうんだ？くそっ。。。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

今日は、近くの演習場に集合だということだ、
サスケ君と歩いて向かっています。

なんでも、サスケ君はこれから僕の家に住居するそうなので。
・・それを聞いたらナルト君も、俺も俺も、って言いそうですね。

「今日は何するのかな？」

自己紹介に演習場である必要ってなんだろう」

「ふんっ。。どうだろうな

さしづめ、独断で試験でもしやがるんじゃないのか？」

そんな会話をしながら、僕達は演習所へ向かいました。

もうナルト君は到着していました。

「おーす！おはようだったてばよ！」

集合時間は、朝の10時。

そして、今は10時の15分前。
少し嫌な予感がします。

それから、30分が経ちました。

「……やっぱりか……！」

先生はまだ来ていません。
遅刻癖は本当のようです。

「よーっし、じゃあ遊ぶ？」

僕たちの、遊ぶは、修行の事です。

フツと、サスケ君の瞳が変化しました。
そう、写輪眼です。

一度、3人で遊んでいた時に、
二人掛りで攻められて、思わず本気で術をぶつけてしまった時に、

目覚めたそうです。はは。

「ちょっと待つて！」

これを言わなくちゃ……。はあ。

僕は・・自然系悪魔の実「ピカピカの実」の能力者の光人間。体を光に変え、光速での移動・攻撃が可能である！！！」

二人が、またか、という目で僕を見てきます。

それもそのはず、昨日も光人間になったって話をしていると、自然に今の文章が口から流れ出たのです。

「信じてないでしょ・・うう・・」

よし！僕にクナイを投げてください！避けないから！」

もしも当たったとしても、治療忍術で、傷から血が出る前に治療すれば済む話です。

「いいのか？」

「うん、サスケ君、思いつきり投げて！」

ノーモーションで、サスケ君の指先からクナイが放たれました。全く、下忍離れしたいい投擲です。

クナイと僕の距離はあっというまに詰まり、そして、それは僕を貫通しました。

二人とも目を丸くしています。

クナイは僕を確かに貫通しました。

僕の治療忍術が早い事を彼らは知っていますが、それでもコンマ数秒は時間がかかります。でも、今のは、僕を、すり抜けました。

「はっははは！！だから言ったでしょう！

僕は自然系悪魔の実「ピカピカの実」の能力者の光人間。体を光に変え、光速での移動・攻撃が可能である！！！」

ナルト君も、クナイを投げてきました。

が、勿論それは僕を通過して、後ろの木に刺さります。

「いきますよ！」

そう言って、光速で彼らの後ろに回りこみ、

二人のズボンを脱がして、元の位置に戻ります。

二人は何をしたの？って顔をしてましたが、すぐに気がついたようです。

「！！！！」

その後、何回か同じ事を繰り返して、サスケ君に怒られてしまったので、やめることにしました。

木遁の術で、簡単な小屋を作り、中で待っていることにしました。

「相変わらず、意味わかんねーってばよ！」

「これは血継限界じゃないのかよ・・・」

「僕はなんでもありだもんねー」

すると、知らない気配が光の網にかかりました。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

第七班！（3）

- * - * - * - * - * - * - * - * -

いやあ、いかんいかん。

初日だというのに、遅刻してしまった。

準備しようとしたら、もう集合時間だったんだな。

仕方ないか。うん。

そう一人で納得して、

俺が受け持つ、3人の生徒を、

アカデミーから送られてきた資料でチェックしながら、

俺は集合場所は向かった。

うずまきナルト

言わずとした、九尾を飼いならしている、里の英雄の子供。

里の人たちにも顔が知れてて、

性格はバカ明るく、ムードメーカー。

そして、お父さんの才能を十分に継いでるみたいだな。

体術、次席。

忍術、上から3番目か。

座学、ドベ。

思わずお茶を噴出した。

あの人はそんなに勉強苦手じゃなかったけどな・・・？

うちはサスケ

うちは一族の生き残り。

ナルト、火影の孫と仲が良く、人格は決して破綻していない。

やはり、イタチの弟か。

忍術、上から2番目。

体術、上から3番目。

座学は真ん中か。

というか、ナルトとサスケは忍術、体術、どっちも首席ではないんだな。

次は・・・と。

猿飛ボル（サリーノ）

（サリーノ）ってなんだ？ まあいい。

3代目火影の孫。上の二人と仲が良い。

天才。最強。チート。
ん？

忍術、首席

体術、首席

座学、首席

少し言葉を失った。

お、なんだか紙切れが入ってる。

火影様からか。孫思いだな、ふふ。

カカシよ。

早急に遅刻癖を治す事を、強く、強く推奨する。

わしの可愛い孫は、わしよりも強いかもしれん。

いや、冗談じゃなく。

未だ下忍なのは、情操教育の為じゃ。なんだ、文句あるのか。

この前、ダンゾウがボルを攫い掛け、逆に始末されたりっ？

その原因は、ボルが、

あの伝説の目、輪廻眼を開眼しているからなのじゃ！

。。。何はともあれ、わしの孫を怒らせると怖いぞ。

思わず顔がひきつる。

・遅刻した事を真剣に謝ろう。

そして、俺は自分の目を疑った。

演習場のド真ん中に、木造の一軒やが建っていた。

木遁の術か・・・？

火影がボケた訳じゃなかったのか。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

「お、後5分ぐらいで先生のご到着だね。
ちよっと、一泡ふかせてやろうか」

「え？俺には分からないってばよ？」

「俺も、だ・・・」

「えっと、先生が来たら、」

ナルト君はここで、あの伝説の技をしてね」

はい、とサスケ君にはカメラを手渡しました。

「サスケ君は、」

ナルト君があんたの伝説の技をしたら、それに驚く先生の姿をおさめてね！」

「よっしゃ！それじゃあ準備だー！」

そう言つて、僕は家から出て、少し離れた木の影に隠れました。

どンドン気配が近づいてきます。

そして、きました。

先生が家の扉を開けます。

中には、あの、伝説の技、おいろけの術で一糸纏わない姿のナルト君。

そして部屋の隅でカメラのシャッターを下ろすサスケ君。

そして、僕は光速で先生の後ろに移動して、ズボンをずり下ろす・・・

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

「おまえらの第一印象は・・・いえ・・・遅れてすいませんでした・・・」

目の前には、白い髪の毛・・・若白髪？の先生が、土下座しています。

「どうかその写真だけは消去してください・・・」

「えー、どうするってばよー？みんなー？」

ナルト君がにやにやしながら、みんなに問います。

「ふん・・・悪いのはどっちか言えば・・・無論。」

少し隙をついて、先生がおそらく本気のスピードで、サスケ君が手にもつ、カメラを奪い取るうとしました。

でも、先ほど僕と遊んでいたのが功を奏したのか、横に飛び、それを回避しました。

「うわあ、この写真はちゃんとおじいちゃんに渡す事にしますね」

「俺の名前ははたけカカシ。
みんなにも自己紹介をして欲しいな」

少し涙目になって、話を変えようとする、カカシ先生。

「俺はうずまきナルトだつてばよー!!」

好きなものはラーメン!

夢は火影になることだつてばよー!!」

「うちはサスケ。

好きなものは・・・こいつら(ボソッ)

夢は・・・じゃあ・・・火影になること」

じゃあ勝負だつてばよー!!つてナルト君が言う。

「僕は猿飛ポルです。

好きなものは友達と、おじいちゃん。

夢は・・・おじいちゃんの次に火影になることノ」

窓から、ひらひらと風にまう木の葉を見て、

カカシ先生が目を細めて言いました。

「みんな火影になるのが夢かあ・・・すてきやん」

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

第七班！（４）

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「さて、じゃあ軽く運動をしよう。」

実際におまえらがどれだけ動けるかみてみたいしな」

「ここに、鈴が一つある。」

俺からこの鈴を奪えば、お前らの勝ちだ」

「それは、先生と一対一だってばよ？」

カカシ先生が苦笑いをして、いいいます。

「ははは・・・別にそれでもいいんだが。」

・・・上忍をなめるなよ？」

ゾクリとしました。

上忍の人の殺気は、やはり心臓に良くないです。

ですが、ナルト君は微動だにしていません。
飛び出し、

「ははん、勝負したらー勝負ー！」

そんな事を言い出しています。

先生は懐に手を入れたと思うと・・・本を取り出しました。

「ちつくしょー！なめきつてるってばよ！」

僕は、すかざずサスケ君と目配せします。

僕らはそれぞれ隠れました。

ナルト君の実力を、冷静に評価するなら、今は中忍の中でも、上のクラス程だと思えます。

つまり、さすがに本を読みながら戦える相手ではありません。

九尾のチャクラを引き出した時は、上忍クラスでしょう。

ふふふ、その戦いはみてみたいですが、

今は3対1という事をきっちり利用させてもらいます。

ナルト君が仕掛けました。

影分身を3人作り、トライアングルのフォーメーションで、先生を狙います。

一人が、クナイを先生の足元に投げました。

勿論先生は簡単にかわします、が。

それはクナイに変化した、影分身でした。

その影分身が、クナイを投じます。

そのクナイもまた、影分身でした。

もうカカシ先生は本を落としてしまっています。

そして、一人のナルト君が、先生の動きを止めました。

そろそろ！と思って、サスケ君に視線を送ります。

サスケ君が飛び出し、すさまじいスピードで、先生に駆け寄り、良いタイミングで、打撃を放っていきます。

先生はナルトくんの相手もしながら、サスケくんの攻撃もなんとかしのいでいます。もうその顔はマジでした。

ふと、ナルトくんの影分身が消えて、サスケくんも一步下がりました。

サスケくんが素早く印を結んだかと思うと、大きく息を吸い込んで、特大の火の玉を吐き出し、ナルトくんも印を結ぶと、大きく息を吸い込んで、半端ない勢いの風を引き起こした。

火遁・豪火球の術と、風遁・大突破の合わせ技です。あれは本当に当たると熱いです。超熱風に、肌があつという間に焼きただれていきました。えっ、いや、僕が喰らいましたから。

サスケくんと、ナルトくんは、鈴を取るってことを忘れてるんじゃないかな？ 久し振りに本気で戦う相手がいることに単純に喜んでそうです。

熱風がはれて、視界が開けると、そこには水の壁にかこまれた、カカシ先生の姿がありました。

「ふいー、危ないところだった。」

おまえら殺す気だろ、俺。

目的分かってるかあ？鈴取ることだぞ？」

おそらく、水遁・水陣壁の術です。

二人がにやりと笑いました。

「ふんっ・・そんなの分かってる」

「自分の腰をみてみるってばよ！」

まさかつ！そんな顔をして、鈴を確認した、カカシ先生。そして、驚愕している顔を上げました。

「もうとつくに取りましたよ」

にこにこしながら、先生の後ろに飛んで、僕は先生に言います。

ナルト君がクナイを投げて、肉弾戦をしている間に、光速でかすめ取りました。

「んな・・いつの間に・・」

「これで、先生の「試験」にも合格ですね」
したり顔をして、先生に言ってやりました。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

先生の試験に合格してから、

まずは手始め、と様々な任務を遂行してきました。

どれも、お手伝いレベルのもので、ナルトくんがフラストレーションが溜まっているのが、目に見えて分かります。

「先生、そろそろBランクとかAランクとか、他の忍との戦闘とか、護衛とかやりたいってばよ・・・」

「無理を言うな。まだ一介の下忍のチームなんだぞ。」

・・・確かに実力を見れば、上忍と中忍で編成されたチームとなんら変わらないが・・・俺がやりたくないし・・・」

そうです、あれからも、カカシ先生と僕らの鍛錬は続いていて、僕らの実力を嫌という程知っているのです。

ただ、僕はあまり鍛錬に参加していません。

僕は二人曰く、「ボルと一緒になら鍛錬にならない」だそうです。少し悲しいです・・・。

カカシ先生には、お前は俺より早い、と言われて、それ以降鍛錬に付き合ってもらえなくなりました。

はあ、それなら最初に光の力を使わなければ良かったです。

話しがそれでした。

つまらない任務だらけ、という事でしたね。

「先生」

「ん？」

「火影の孫の権力・使います!!」

「おおおお!!」

「えー・・・」

という訳で。火影宅。

「おじいちゃん! 任務つまらないよお」

「ボルや! その言葉待っておったぞ!
今丁度目を付けてるものがあつての。

どうみても内容を詐称している任務があるのじゃ。

波の国に出向いて、動物などから橋を作るのを護衛する。
表向きはそんな簡単なDランクのものなのじゃがの。

おそらく、裏に何かがある」

「そうそう! そうゆーのだったばよ!」

「ほほ、慌てるでない、ナルトよ。

では、カカシ、孫達を頼んだぞ」

カカシ先生は思わず頭を抱えてました。

「それじゃあ、今日は解散ってことで。

任務内容とか確認してく・・・るのはナルトの仕事な!」

「えー！なんでってばよー！」

「あはは、じゃあ3人でいこっか」

「おう」

「さすがボルだってばよー！」

「じゃあ、行って来ます、とおじいちゃんに言って、
僕らは町へ出ました。」

「そういえば、最近は任務続きで、なかなか自由に遊べなかったね」

「遊ぶって・・・修行か!？」

「あはは、違う違う、そっちの遊ぶじゃなくて、普通に」

「確かにそうだってばよー」

「任務続きのおかげで、結構なお小遣い持ってるんだし、
今日は思いっきり買い物とかしようか？」

「賛成だってばよー！」

「反対じゃないっ・・・」

「よーし、そうと決まれば、早速行こっか!」

「おっ！ボルちゃんにナルト！
最近見なかったねえ！ほら、これでも食べな！」

「おっ！久し振りじゃねえかおまえら！
これでも食つとけ！」

「きゃー！木の葉のイケメンチーム！
サインしてー！」

「おっ！いつのまにか下忍になっちまったんだな・
成長したなあおまえら！ほら！新しい忍具だ！」

・・・おなかいっぱい、道具いっぱい、疲れました。

すっかり日も暮れて、五月の暖かい春の風が、
僕らの背中に優しく吹き付ける。
こうして、親友と歩く道は、まるでベルトコンベアのように、
全く疲れを感じさせない。

ずずずつと小気味の良い音をたて、麺が口へ吸い込まれる。
デジャヴ・・・ではありません、もう何度目かわかりません。
「いやーやっぱりー楽のラーメンは最高だってばよ！」

「今日は・・・疲れた・・・」

「うんー、買ったものより貰ったもののほうが多かったね！」

ふと、箸が止まりました。

何かを忘れていているような気がします。

「あ、任務の詳細聞くの忘れてた」

ずてつとイスから倒れる音がしました。

ナルトくん。ないすサイレントつっこみ。

そして、じゃんけんで負けたサスケくんが、
僕らの代わりに行ってくれる事になりました。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

夢の国波の国！

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

今、木の葉の大門を背にして、
僕らは立っています。

目の前には、波の国の橋作りの職人、タズナさんが居ます。
僕らをじろじろと、観察しています。

あまり良い気分じゃないんですけど・・・。
任務を詐称していると思われる人物を、
こっちが問いただきたいぐらいです。

「おまえらが、わしの護衛かい
超心配だぞい」

「なんだってばよ！
守って欲しいんだったら・・・」

カカシ先生！なんとか言ってやってくださいよ！

「ていうか任務の内容「まあまあ、確かに、この子達がどんな敵を
も躊躇なく踏みにじり、
血反吐を吐いてるその体を蹴り飛ばす。
そんな風には見えないでしょう、でも、そうなんです」

・・・。そんなドヤ顔で物騒な事を言わないでくださいよ・・・。
タズナさんの視線が、観察から、警戒へと変わりました。

「ちよつと、先生〜！」

あ、僕は、ボルです。どうぞ気軽に話しかけてください」

「おおう、超話しの分かりそうなガキだな、超よろしく頼む」

火の国の街道を使つて、特に何事もなく順調に、
波の国への歩みを進めていました。

そして、タズナさんを狙うものが現れたのは、
木の葉を出発してから、五日目でした。

まだ、舗装された、

「道」といえることの出来る道を歩いていたときです。

何かに対して、

僕の第六巻がけたたましくアラームをならしています。

光の網を広げってみました。

前方に、チャクラが漏れ出している、水溜りがありました。

「先生？」

カカシ先生も、何か感じていたようです。

「今から少し行ったところに、水たまりがあります。

そして、この二日間、雨は降っていません。」

今の言葉を聞いた、ナルトくとサスケくんも、

息を吹き返したように、ピシッと背筋を伸ばしました。

・・・戦闘狂め！

もう、僕達の実力をはっきり分かっているカカシ先生は、的確に、指示を出します。

「俺とボルで先行して索敵。

敵を捕捉しだい、始末にかかる。

サスケ、ナルト。タズナさんを頼んだ。」

「えーっ！俺が戦いたいってばよー！」

カカシ先生は、はあ、と一息つきました。

「いいか、これから、殺し合いを始めるんだ。

修行じゃない。お前達が強い事は分かっている。

ただ、それは、覚えておいてくれ。」

良い事言いますね。さすが先生。

カカシ先生が、瞬身の術で、移動していきました。

僕は輪廻目を発動させ、光になって、移動します。

あ、カカシ先生に「目」を見せるの、初めてだ。

- * - * - * - * - * - * - * - * -

こいつらのチームの担当となってるから、碌なことがありゃしない。

火影様からの無言の超プレッシャーは、きりきりと、俺の胃を苦しめる。

そして、簡単な任務ばかり選んでいたら、ナルトがダダをこね始めた。

想像はしていたさ。

アカデミーの上位3人を組ますなんて、前代未聞。どうせ下忍離れたら任務をさせるのだろう。

ボルが、おじいちゃまである、火影様から、丁度良い偽装任務を頂きやがった。

孫に与える前に偽装について何かアクション起こせよ！
そんな事、口が裂けても言えなかった。

そして、今日からその任務に取り掛かる。

あれは、木の葉を出発してから、5日目だった。

ふと、何かが勘に引つかかった。
辺りをそれとなく見回してみるが、
不快な気がかりをなくしてくれるものはない。

そのとき、ボルが口を開いた。

「先生？」

視線で返事をする、

「今から少し行ったところに、水たまりがあります。
そして、この二日間、雨は降っていません。」

何で分かるんだよちくしょう。
でも、こいつは嘘をつかない。

ナルトとサスケも気を引き締めている。
こいつらの信頼関係は厚いなあ。

リーダーとして、指示を出す。

「俺とボルで先行して索敵。
敵を捕捉しだい、始末にかかる。
サスケ、ナルト。タズナさんを頼んだ。」

そして、瞬身の術を使い、前方へ高速移動する。
ボルは、何かチャクラを練って、移動をするようだ。

水溜りが見えた。
そして、ボルが居た。

早いつてレベルじゃねーぞおら！！

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

目の前には、水溜りがあります。
カカシ先生を抜いてきてしまったようです。

急な、敵の出現に、水溜りが揺れて、姿を現そうとしていますね。

ふふふ、カモですねー。水遁の術でしょうか？

人を殺す事となるのは、おそらくこれが初めてとなります・・・。
でも、不思議と恐怖心などは覚えません。
「白い光」のチャクラのおかげでしょうか？

・・・って事は、本気を出せる訳ですね。
光人間になつてから、
「鍛錬」では、全く本気を出せなくなってしまうていました。

口ではタズナさんに詰問してるが、俺がため息を吐いたのは、ボウだよ！

俺の瞬身が遅すぎた？異議あり！！

そんな事はない！

指示を与えて、俺が到着するまで、僅か5秒！

「この任務の裏には・・・ガトーがおる」

・・・我々は特に反応がない。

「お、驚かんのか！？普通驚愕したり、ぶっ倒れたりするんじゃない？」

ワレワレヲ オドロカセル ノハ ゴカゲ カ サンニン
もうすっかり、3人の教え子のペースに飲まれてしまった。

「そうですか、ガトーですか。

内容の詐称、規約違反ですね。

次から気をつけてくださいね。

じゃあ行きましょう」

啞然としているタズナさんを置いて、

俺は心では泣き叫びながら、歩みを進めた。

隣の桃地くん

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「それにしても、光人間とかずるいつてばよ」

「・・・本当だ」

「えー、知らないよー、勝手になつたんだもん・・・」

この前の襲撃から3日が経ちました。

今僕らはタズナさんの指示で迎えにきていた漁船と合流して、波の国に向かっていきます。

「じゃあ俺は風人間がいつてばよー!!」

「ふんっ！バカが・・・俺は火炎人間（ボソツ）」

「おい！静かにしてくれ。わざわざ霧の中船を出しているんだぞ！ガトー達に見つかったらどうなると思ってるんだ!？」

「ひねり潰すつてばよー!」

「・・・潰す」

殺気立っていた船頭さんが、ふつと肩の力を緩めました。

「なんだか、おめえらと居ると安心できるや。

俺はな・・・

「超だまって漕げ」

タズナさんが船頭を注意しました。
自分に甘く他人に厳しいなんて救えませんね。

マングローブを抜けて、陸に上がりました。
しばらく道なき道を歩いていくと、
どんと霧が濃くなっていきました。

カカシ先生の顔に表情がなくなっていました。
「先生、どうかしたんですか？」

「ボウ、この前みたいに敵の位置分らないか？
この、霧、あやしすぎる」

僕はハツとしました。
多少実力があるからって、うかれていたようです。
経験不足。この一言でした。

確かに波の国とはいえ、
この、だんだんと濃くなっていく霧に、
警戒をしなかったのは、迂闊でした。

その時です。

「全員、伏せろ！」

ナルトくんの頭を抑えながら、カカシ先生が叫びました。

その二人の頭上を、何かが高速で通過していきました。

咄嗟に、輪廻眼を開き、体を光にします。

カカシ先生がサスケくんを目配せすると、とつさに身を起こして、タズナさんを守る位置へと移動しました。

僕は、何かが飛んできた方向を凝視します。

霧とはいえ、チャクラの流れが見えます。僕には輪廻眼があります。

少し高めの身長、男が見えました。

すると、その男が投擲した何かを追いかけるように、移動しました。

先ほどのザコ兄弟とは違い、それなりの殺気を浴びせられ、少し緊張で筋肉が固まります。

「へー、こりゃ、こりゃ、霧隠れの抜け忍、

桃地再不斬君じゃないですか」

カカシ先生が口を開きます。

視界をさえぎる霧の中、

さきほど投擲し、木の幹に突き刺さっている何か

・・・大きな包丁のようなものに一人の男が立っています。

「なんで木の葉の忍びがこんなところに・・・？」

男が呟いたのを、僕は聞き逃しませんでした。

「おまえら、こいつはレベルが違う。

決して油断するな」

ふと、霧が一層と濃くなりました。

「霧隠れの術」

桃地と呼ばれる男の術だろうと思います。

「八箇所。

咽喉

脊柱

肺……

いけない、びびってないで、なんとかしないと。

そう思つて、必死に頭を働かせて、

「みんな！伏せて！」

僕の言葉に、カカシ先生がタズナさんを伏せさせて、

ナルトくん、サスケくんも伏せたのを確認すると、

桃地に悟られないように、無言詠唱で、光速で印を組み、

風遁の基本技である、風遁・烈風掌を放った。

チャクラを変質させて風を生み出し、

柏手とともに圧縮して突風へ変化させる技だが、

高格の術者が使えば、それはとんでもない威力となる。

霧を一齐に吹き飛ばし、視界が晴れました。

ご丁寧に人体の八箇所を読み上げていた、

桃地君が恥ずかしそうに早口で終わらせました。

舐めてかかっていた下忍が、なかなか出来ると見えて、

印を組み始めた、桃地君。

水遁・・物質的に、水は火に強いのだが、
チャクラの性質的には、火の方が水より勝る。

僕は、光速で印を組み、先に印を組み始めた桃地君よりも先に、
術を放ちました。

炎が、龍の如く桃地君に向かっていきます。

おじいちゃん直伝の、火遁・火龍炎弾。

炎はチャクラで操られているため、避ける事は非常に難しい。

印を組んでいた桃地君の目が見開かれました。

まさか、一介の上忍の部下でしかない、下忍風情が、

先に印を組み始めていた自分よりも、印を早く組み、

更に、超上忍級の術を放つとは、思ってもなかったのでしょうか。

一発で上忍一人分程のチャクラを練った、

火龍炎弾が直撃した桃地君は、吹っ飛びつつも、立ち上がった。

喰らう直前に水遁で体を囲ったようでしたが、
ダメージは相当のようです。

すると、光の網に何者かが反応しました。

「もう一人、11時の方向から!!」

ナルト君が、九尾のチャクラを身に纏い、突っ込んでいきます。

「待て!!」

誰の声かと思えば、桃地君だった。

「その子だけは・・・見逃してくれ・・・頼む・・・」

ナルト君が、同年代ぐらいの可愛い女の子を、連れてきました。

少し困惑した様子で、カカシ先生が声を出しました。

「おい、どうということだ？」

ガトーからの仕事で、俺らの妨害をしてるんじゃないのか？」

桃地君は更に困惑した様子で、

「え？ああ、そっだよ・・・って違う・・・

俺は知つての通り、霧の抜け忍だ。

ただな、その子を見つけて、誓ったんだ・・・

真っ当に生きよう。と・・・

長くなっちゃったな・・・」

そこまで言うと、ドタッと倒れてしまいました。

困惑している僕達。

泣きそうな顔でナルト君に腕を掴まれている女の子。

・・・悪いのは僕達???

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

戦後処理

- * - * - * - * - * - * - * - * -

僕は少しバツを悪くしたような顔をして、

タズナさんの家へと向かう、第七班の後をとぼとぼとついていきま
した。

「そんな落ち込むなってばよー！」

ナルトくんが明るく話しかけてきてくれます。ああ嬉しいです。

「ふん・・治してやったんだから、気にすんなよ」

サスケくううん！優しいのね！ありがとう！

「だから言ったじゃない」

「言っていないでしょばか！」

思わず、生徒の気持ちを考えない先生に反抗してしまいました。

そんな僕らを、恐る恐る見つめてくる、女の子。

勇気を振り絞って、話しかけてみることにしました。

「はじめまして、僕はボウ。

君の名前を教えてくださいますか？」

「私は・・・白です。」

訳あって、桃地さんに拾われて、木の葉へ亡命するところでした」

ずん。と僕の心に、何気ない言葉が落とされていきます・・・。

「身寄りもない私を、桃地さんは拾ってくださって・・・」

ずん。ずん。

「決してやましい目的じゃなく、

ただ娘として接して貰ったような気がします」

ずん。ずん。ずん。

「木の葉へ通じる、比較的安全な道へは、

川を渡らないといけませんから、船を待っていたのですが・・・」

ずん。ずん。ずん。ずん。ずし。

「うわあああああああ！！」

僕の心は罪悪感に潰されました。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

「それで、木の葉に連絡して、

亡命しようとしてた、って事で確かだな」

「ああ」

そう言うのは、桃地再不斬。

霧隠れの鬼人としてその名を轟かせた元霧隠れの暗部。

しかし、まあ。

流れるに、すっかりガトーの手先かと思ってた。

「鬼兄弟ってのを、知ってるか？」

「ああ、ザコ兄弟か。

名前しかしらねーなあ」

木の葉への連絡を何かしらの手段で聞いて、

霧の里が桃地君を始末するのに、送り出したってところか・・・？

・・・しかし、中忍が二人集まろうと、再不斬程の男を始末できるのか？

もしや・・・あの鬼兄弟も・・・亡命者・・・？

・・・いかんいかん！そんな事ない！やつらは霧の手先！以上！

「任務を、協力しないか？」

俺らの任務を協力すれば、それを木の葉への手土産にすればいい。証言はならばいくらでもする」

「そんなの・・・俺が居なくても、

おまえのところの小僧に任せておけば良いだろう。

しかし、木の葉へ入りやすくなるっていうのは魅力的だな。
よし、良いだろう、俺もついていく」

- * - * - * - * - * - * - * - * -

今、私達はタズナさんというおじさまの仕事のお手伝いの、お手伝い。

という事で、その仕事場へ向かっております。

そして……。

嗚呼。

初めて会った時、心が締め付けられるようでした。

これが、運命の人。なのででしょうか。

その茶色のさらさらの髪。

綺麗な二重。

色気を感じる唇。

名前を、ボルさんと言っそうです。

ボル、さん……。

なんて素敵な響きなのでしょう……

「ボル……」

口にするだけで、幸せな気分になれます……

「はい？」

あっ

振り返ったと同時に、すぐ後ろに居た為、キスを、キスをしてしまいました・・・。

私の初めてを・・・。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

あまりの可愛い顔立ち、肌の色、言葉遣い。

全てに僕は魅了されてしまいました。

すぐ後ろを歩いているだなんて、信じられません。

後ろを振り向いて、その頬に手を当てて、ぷにぷにしたい・・・。

そのさらさらの髪の毛に鼻を押し当てて、くんかくんかしたい・・・。

あ、いけません。下衆な考えが頭に繁殖してきました。

「ボル・・・」

どきっとしました。

白が、名前を呼んだのです。情愛たつぷりに。心臓がドキドキしてきました。

「はい？」

そういつて後ろを振り返ると、

やわらかい何かが、唇にあたった・・・

へ？

はじめてのチュウ

君とチュウ

i will give you all my love、だ
つてばよ

へ？

「ボルが白とチューしたつてばよ！..!」

「ふんっ・・・!？」

僕は顔が熱くなるのを感じて、何もいえなかった。

白は、頬に手を当てて体をイイヤヤさせている。

ああ、可愛いです……。はっ！いかんいかん！

前方から凄い殺気を感じました。

「八箇所……」

ひいひい、すいませんでしたああああ！

戦後処理（後書き）

感想お待ちしてまふ！

その一行が百行に変わります！

アイデア、頂ければ使わせていただきますまふ！

小さな怒りのうた

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

何はともあれ、タズナさんの家にたどり着きました。
橋作りに、着工します。

ナルト君曰く、

何度か、ガトーの手先が家に圧力を掛けにきたようです。

家族に見せないように、始末したそうです。

橋への妨害も、ちょこちょこありました。

どれも未遂に終わらせています。

橋の建設も順調に進み、だんだんと完成に近づいていきました。

今日は、白と二人で橋の護衛にきています。

僕は、手を繋いでいます。

・・・そう、そういう関係になりました、なれました。

「加藤さん、あんまりきませんねー」

「白ー、加藤さんじゃなくて、ガトーねー」

「あ、そうでしたー」

「あははー」

恋。

それは、幸せです。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

おや、今日はついに全面戦争でしょうか？

ゾロゾロと、ならず者や、ヤクザを後ろに大量に従えて、いかにも悪役らしい小柄なおじいさんが、現れました。

「おらあ！何度言ったらわかるんだよ！？」

とつとと道具片付けて帰りやがれ！！」

先頭の男が、大きな声で威嚇をすると、作業していた男の人達が、こちらに戻ってきます。

「それじゃ、ボルくん、あいつら頼んだぜ！」

そう言う、男達の顔は決して悲壮感に包まれてはいませんでした。

「はい、ぱぱつと蹴散らしてやります」

少し、僕の心の中では葛藤が生まれました。ほんの少し。

殺す事はせずに、退かせるか。

頭、ガトーだけ潰して、退かせるか。

皆殺しにするか。

そうこう考えているうちに、

どんどんとガトー達との距離が詰まってきました。

男が、汚い顔を、にやにやと下衆な笑いで染めて、

「おら、坊主、怖くて動けないのか？」

その可愛い子ちゃん置いていけば見逃してやってもいいぞ？お？」

おっと、白が居る事を忘れていました。

「白、下がってていてください」

「はい」

綺麗な声で返事をして、白がてくてくと、歩いて戻っていきます。

白の背中を見送って、

「残念ですけど、

ここの橋の完成を見守るといのが、僕らの任務です。

僕も、手を血に染めたくはありません。

出来れば帰っていただけないでしょうか？」

なるべく丁寧に、そういいました。

「っざけやがって!!!!!!」

「ブツ殺してやる!!!!!!」

あっという間に頭に血が登ったヤクザ達の一人が、弓を番え、その弦を引きました。

放たれた矢は、真っ直ぐに僕へ飛んでいきます。

「残念です。僕には当たりませんよ」

男達は、驚愕しています。

放った矢が、僕を貫通したのに、血も出ていないのですから。なぜなら僕は光人間（略）。

「ガキに当たったのは見間違いのようだな！でも、あったりー!!」

ゲラゲラと、男達が笑っています。

どうしてでしょうか？

後ろを振り向きました。

そこには、背中に矢が刺さって倒れている、白の姿がありました。

波の国編終了！

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「いやあ、ボルくんの強さはとんでもないからなあ」

「「「んだな」」」

「あいつら帰ったら、とつとと橋作っちまうべ！」

「「「おうよー！」」」

そう言つて、おいら達は後ろを振り向くこともせず、少し休憩するべ。そんな軽い気持ちで戻っていった。

その時だった。

恐怖。

全身の毛穴が開いたような、
身の毛もよだつような、
骨の髄から体を揺り動かすような。

膝をついて、なんとか立っていられたのはおいらだけだった。

周りの仲間や、見習いの若いのは、みんなぶっ倒れちまってた。

何が起きたんだ!?

そう思って、後ろを振り返った。

自分の目を疑った。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

「コロシテヤル・・・」

自分の意識が、黒い怒りに飲み込まれていくのが、分かります。それに抗う事は出来ません。

ただ、憎悪の感情が体中を流れていきました。

本能のままに、印を結びます。

広い橋を、埋め尽くした男達の、右側に居た集団が、突如出現した、巨大な立方体のブロックに、押しつぶされました。分子レベルまで分解し、消滅させるという訳の分からない術です。

「塵遁・原界剥離の術」

「火遁・大炎弾」

口から吹かれた超強大な温度の高い青白い色の炎が左側に居た集団を直撃し、灰すら残っていません。

「水遁秘術・千殺水翔」

橋の外の、広大な水が、急に男達の上に移動し、大量の千本に変化し、とてつもない勢いで降り注ぎました。とてつもない早さで、人間が、ただの肉片へと化していきます。

そして、残ったのは、矢を放った男、唯一人。

ゆっくりと、歩み寄っていきます。

男は尻餅をつき、その股間からは湯気が上がっています。

「あなただけは許しません・・・」

つかの間ですが、本当の地獄を味わってください」

ゆっくりと、見せ付けるように印を結びます。

「沸遁・巧霧の術」

体内のチャクラを強酸の霧に変換し、

男の足に、手に、股間に、胸に、そして顔に吹きかけました。

「ぐあああああー!!」

しばらく叫び続けましたが、

男はやがて呻き声に・・・そして、その声を止めました。

ふと意識が戻りました。

改めて、自分が虐殺した男達を見て、
嫌悪感に浸ります。

でも、悪いのは向こうだし!!

・・・何故？

・・・白を攻撃したから。

白？

あっ!!!

・・・結果から言えば、

白は、別に重傷でもなんでもありませんでした。

先ほどの、僕の禍々しいチャクラで気を失っていたので、
矢を引き抜き、医療忍術を施し、目を覚ましたかと思うと、
おやすみ、と言って、すやすやと眠ってしまいました。

残ったのは、僕と、寝ている白と、無数の死体。

千本によって、無残な事になった肉片を風遁で、
橋から落とし、魚の餌にし、

血がこびりつく前に、水遁の術で、綺麗にしました。

・・・そして、僕を見ていたのがもう一人居た事に気付きました。
橋作りのおじさん達の棟梁さんでした。

「お、おまえ・・・」

「みんなには秘密にしてください」

そう言つて口に指をあて、幻術を発動させた。

悪いけど、今のは全て夢だった事にしてもらいました。

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「それでは、私達はこれで」

そう言うのはカカシ先生。

無事に橋は完成して、

僕達の頭文字をとって、

カボサナ大橋と名づけられました。

「結局、ガトーってのは一度もこなかったてばよー」

「ふんっ・・・どうせ規格外の攻撃を受けて
一度も喋らずに死んだんだろ・・・」

ドキッ。

「まあまあ、無事に任務を消化できて良かったじゃないか？な？
里へ戻ったらラーメンでも奢ってやろう」

「わ、カカシ先生つてば太っ腹！」

そして、

白と桃地君は、僕らと一緒に木の葉に帰ります。

桃地君は、やはり抜け忍なので、
多少取調べがありそうですけど、
きっと木の葉でもやっていけると思います。

白は、おじいちゃんに言って、出来れば一緒に住みたいです。
もう離しません。

こうして、僕らの始めての高ランクの任務は、幕を閉じました。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

帰還！そして修行！修行！

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

波の国での任務を終えてから、
僕達は先生に、1週間程の休暇を貰いました。

きっとカカシ先生がしばらく休みただけなのかもしれませんが。
・ ・ あれ、先生ほとんど何もしてなかったはずなんだけど ・ ・

1週間。

短いようで、長いようで。

その間、僕達第七班の3人は、修行にあけくれました。

サスケくん、ナルトくんは、

初めての、確かな殺意を持った自分よりも強い敵、
つまり桃地君と対面した時に、萎縮してしまった事を恥じて、
必死で力をつけ、自信をつけようとしていました。

本当は、波の国から帰ってきて、すぐにも修行をしたかったのですが、
僕らが逆らえない人 ・ ・ おじいちゃんがそれを阻みました。

何があったかというと、

・おじいちゃんの、

「初の高ランク任務を終えた孫達を祝うイベント」でした。

其の壱

僕らが波の国から、里に帰ってきた時。

門の前で、腹心の部下の暗部3人と共に……。

盛大に帰還を祝ってくれました。

何重もの、水のアーチに、何匹もの炎の龍くぐらせ……、
岩で出来た槍を地面から出して消して。
……そう、高等忍術を使って。

其の弐

出迎えを終えて、とりあえず任務の終了の報告をしに、
火影宅……我が家へ向かうのですが、
事前に町の人に声を掛けておいたのか、

「おまえらやったな!!おめでとう!!」

「いよっ!!木の葉の期待のホープ!!」

「そら!とっておきのメロンだよ!!」

賛辞の言葉と、プレゼントの嵐……。

其の参

任務終了の報告を、火影様……おじいちゃんにしました。

すると、僕ら三人に、それなりの重さの布袋を渡してくれました。

「これはなに？」

おじいちゃんは、にんまりと笑って、

「任務の報酬＋．．お小遣いじゃ！」

しかしそれだけではありませんでした。

バサッと紙の束を机に置き、

「＋．．高ランクの任務じゃ！」

一度こなした実績があるからの、もう偽装任務を探さなくても良い
「！」

これはあまり素直には喜べませんでした．．。

「俺にもお小遣い．．」

部屋の隅でカカシ先生が丸くなっていました。

其の

「おじいちゃん、これ僕のお嫁さん」

「はじめまして、白でいいます」

「なんじゃと!？」

・・猿飛白つて響き悪く無いかのう?。」

- * - * - * - * - * - * - * - * -

僕らの修行は、常識からとても掛け離れていたと思います。

おじいちゃんの権力をフル活用して、
使われていない演習場を借りる事ができました。

ウォーミングアップ中のことです。

「じゃあ今度は僕に術を当ててみて!」
そういえば、光人間になつてから、
一度も術を食らう事がなかったと思います。

「ん・・・?いくつてばよ?」
ナルト君が、僕に対しては遠慮なく、カマイタチの術を放ってきてま
す。

スパッ!

「いたたたたああああ!・・・ふー。

あれ？きれた？」

カマイタチが、横つ腹を切り裂いたのです。すぐに治療忍術をかけたので、問題はないですけど。

「光人間は攻撃当たらないんじゃないのか？」

僕もそう思っていたんですけど・・・。

「あ、クナイを普通に投げてみて？」

ヒュン！投げられたクナイは僕を貫通して、後ろの木に心地よい音をたてて突き刺さりました。

なるほど・・・。

「チャクラを纏った攻撃には、攻撃当たっちゃうみたいだ・・・！良かった、桃地君とか強い人に本気の技当たる前に気付いて・・・」

「おおー！なるほどってばよ！でも体術は当たらないってば？」

閃きました。

「それだあー！！」

チャクラコントロールに一ミリも狂いが無いサスケくんと、バカげたチャクラを誇るナルトくん！！」

「な、なんだってばよ」

「な、なんだよ」

帰還！そして修行！修行！（後書き）

感想超ありがとうございます！！

超読んでます！

マウスのほいーるが擦り切れるぐらいに！

アイデアお待ちしておりゃす！

修行！（2）

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「なあなあ、俺の番？俺の番？」

今さっき組み手を終えたばかりのナルトくんが、
まだかまだかと尻尾を振っています。

「ちよつと待つてよー」

・・・あ

そう言つて僕は良い事を閃きました。

木分身の術です。

他の分身と違い細胞を元に作られていて、
十分な攻撃・防御力を持つために、単身で戦場に送られる事もあり
ます。

「おー！ナイスだつてばよ！

サンドバックゲットだつてばよ！」

木分身の僕がちよつとやるせない顔をしています、気にしません。

そして、お互いに組み手を再開しました。

お？

おお？

おおお？

「おおおおおー！！」

いきなり大声を出した僕に驚く、3人。

「どうした？」

「サ、サスケくん！影分身だして！」

「お、おう」

ボンッと、サスケくんの影分身が出てきました。

チャクラを纏った防御を要求して、組み手を再開します。

「なるほどー！！」

ナルトくんはわかっていないようです。

「ふふふ・・ナルト君。」

影分身が見ている景色、意識しなくても見えるでしょう？

言い換えれば、影分身が経験している事は、経験できる。

つまり、修行の超効率化です！」

それから、僕は無限のようなチャクラを活かして、木分身を数千体出し、ナルトくんも九尾の力を引き出して、影分身を数百程出します。

サスケくんは、僕ら二人に比べるとチャクラの総量は少ないので、十数体の影分身を出して、毎日死を感じる間際、倒れるまで修行しました。

木分身を使ってる僕の経験値は光速であがっていきました。

そして、ナルトくとサスケくんにも、大きな変化が生まれました。

大量の影分身で、チャクラを流して、組み手をする事で、チャクラの扱いがより一層うまくなり、性質を意識して組み手をするようになり・・・。

サスケくんは、火だけでなく、

風、雷のチャクラの性質も使いこなせるようになりました。

通常の上忍は2〜3使えるというので、

このまま鍛錬を続けていけば、4つ以上使えるかもしれませんね！

・・・僕は輪廻眼っていう・・・

おかしなものがあるので何故か5つ使えますけど・・・。

雷の属性のチャクラを手に集中させての攻撃は、僕の治療術でさえ回復が間に合いませんでした。

ナルトくんは、性質を増やす事はできませんでしたが。

が。

九尾のチャクラを莫大に消費しながらの鍛錬で、更に九尾の力を引き出せるようになり、

濃密のチャクラが具現化して、九尾のものと思われる、尻尾が、2本、見えるようになりました。

光速で移動しても、正確に僕を捕捉して、攻撃を加えてきます。早さだけなら滅多に負けないんじゃないかと思えます。無論、攻撃力は文句なしです。

修行！(2) (後書き)

次！

があらくんのしゆかくに対抗するため、
とっておきのものと契約します！

愛してるの響きだけで、大きくなれる気がするよ、いやん

- * - * - * - * - * - * - * - * -

明日から、また任務を再開する予定です。

この6日間で、

びっくりするぐらいレベルを上げる事が出来た僕達。

これからどんどん高ランクの任務をこなしていきたいです。

無事に6日間、死なずに修行を終える事が出来ました。

ナルトちゃんと、サスケくん。

3人でフラフラになりながら、帰路につきます。

ここ1週間は、ナルトくんもうちに泊まっています。

そして、白が来た事もあって、

おじいちゃんはいつてもより更に上機嫌な日々が続いています。

「も、もうだめだってばよ〜」

そう言っつて、家につくなりナルトくんが倒れてしまいました。

「ふんっ・・・このノストラダムスがっ・・・!」

「えっ」

サスケくんが面倒くさがりながら、ナルトくんを運んでいってください。

「あ、白、ただいま」

「おかえりー」

そう言っつて、白が冷たい手で僕の頬を挟んでくれました。

「ボウ、少し熱っぽくない？」

「え、そうかな？」

・・発情「ボウー！おじいちゃんとお風呂入らんかー！？」

「」

二人の時間に横槍が投げ込まれましたが、

白い頬をちよっぴり赤く染めて、

「お風呂入って体の疲れとりなさい」

お母さんみたいに僕に言ってくれました。

白・・・君が愛しい。

お風呂にはいって、さっぱりした体で、

白の手作りのご飯をみんなで食べ、

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

な、何が起こってるんでしょう!?

いえ、家が燃えている!!

果物屋のおっちゃん!

野菜屋のおばちゃんが!!

どうなってるんだ!?!???

あ、あれはサスケくん!!

何処にいくんだい?

・ ・ 聞こえてない! くそ!

ナルトくん!

君 ・ ・ 尻尾が9本 ・ ・ 封印が解けてる ・ ・ !? ?

このままじゃ木の葉が ・ ・ !? ?

九尾と向かい合ってるのは ・ ・ 狸!?!???

なんで禍々しいチャクラだ ・ ・

や、やばい!!!

九尾がこの世界ごと消そうとしてる!!!

膨大なチャクラ、それだけじゃない・自然エネルギー!?
なんだあれは、みたことない・

はつきりと視認できるほどに具現化されたチャクラと、
何かのエネルギーが、どんどんとその大きさを・
世界を・飲み込んでいく・

・
・
・
・
・
・
「へあつ!!!!!!」

超巨大な、赤と灰色のタイツか何かで覆われた、
二足歩行の、頭にトサカのある、何かが、
僕に話しかけている。

「へあ!へあ!」

契約しろ?

「へあつ!!!!」

分かったよ

「へあつ!!!!!!」

トサカが飛んできた
避けれない
心臓につきささった

これが・・・死・・・「ボウ!!」

ん・・・誰だあ・・・?

「ボウ!朝ごはんの時間!」

うーん?朝ごはん?

あれ・・・?

そして、夢は終わった。

契約！！

「はあ…はあ…」

夢でよかったです…

僕は、普段夢を見ません。

そして珍しく見た夢が、あれ。木の葉の崩壊。

もう一度。夢で良かったです。

しかし引つかかるのが、

起きる直前に見た、赤と灰色の、何か。

しかも夢の中で契約してしまいましたからね。

後で試しに口寄せしてみますか。

そつえば魔獣を使役するのに、

年齢制限はなかったはずです。

「ボルー？」

あ、すっかりご飯で起こされた事をわすれてしました。

部屋に降りていくと、

昨日もあれほどふらふらだった、

ナルトくんも、サスケくんも、もう起きて、ご飯を食べていました。

おはよー、とみんなに声をかけると、

まだ眠気の抜け切っていない声で、返事が返ってきます。

「変な夢見てさ、眠れなかったー」
苦笑いしながらおじいちゃんに言います。
特に言葉はありません。
目の前の焼き魚の骨を取るのに、神経を集中しているようです。

「どんな夢だったってばよ？」
なんでも無い話にも反応してくれるナルトくん……！！

朝っぱらから暗い話しはやめようと思って、
木の葉が戦火に包まれること、九尾が目覚める事はやめとこうと
思って、

「変な宇宙人みたいのに契約させられた、あはは」

「なんだよ、それ」

「変な話しだつてばー」

それから、しばらく休暇最後の日を修行につかうか、
何かするか、話していました。

すると、綺麗に魚を食べ終わったおじいちゃんが、
その止まっていた時間の会話の情報が、
まとめて頭に入ってきたようで、

「おお、ボル、おはよう！」

と、僕が部屋にきたあたりから、
会話に対しての返答を始めました。

これが、痴呆でしょうか。

しばらく微笑ましくおじいちゃんを
みんなで見てみると、

急に体から殺気を放ち始め、
何事かと思つて僕らも体を緊張させると、
低い声で、搾り出すように喋りだしました。

「夢の中での契約…」

それは古来より伝わる、
世の常が乱れる時に起こると言われる…

ボル、契約を、したのか？」

もう会話の巻き戻しは中断されたようです。
あまりのおじいちゃんへの迫力に圧倒されながら、
「はい…」

「心の臓を、奪われたか？」

ええっと、確かにトサカ投げられて…。

「はい…」

すると、はあと溜息をついて、
「よもや孫がそこまでの者とはなあ…」

「どづいつ事なの？」

すると、重たそうな口を開いて、説明してくれました。

夢の中での契約は、そのまま現実に反映される。心の臓を食われたということは、死ぬまで取り憑かれる。

といっても、憑依者のチャクラの味を気に入っているので、毎日ほんの少しのチャクラを与えてあげれば、口寄せも可能だし、大きな戦力になる。

また、夢の中に現れる事の出来る、妖怪、魔獣は相当高位のものなのである。

「ふむ、とりあえず召喚してみようかの」

契約！！（後書き）

感想お待ちしてます！

ほしのおつじさま

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「それじゃー、今日は修行も何もしないでおやすみだつてばよ？」
休みに対して嬉しいのか、
修行をしないことに何かひっかかる事があるのか、
どう反応したら良いか悩んでる、ナルトくん。

「ふんツ・・・しかし・・・暇になるな・・・」
任務をするか、修行をするかしてきた僕ら。
やっぱりサスケくんも戸惑っています。

「よし、ボルやー。はやくしなさい」
そうつかれているのは、3代目火影様。

どうやら、早く口寄せの実験を試みたくてたまらないようです。

「あ、口寄せするつてば？」
「じゃあ俺も見学するつてばよー！」
「ふんツ・・・面白そうじゃないか」

獲物を見つけた肉食動物が、目をきらきら輝かせています。

ここは、僕らにとってはここ1週間で、
もうすっかり慣れ親しんだ、使われていなかった演習場。

雑草が茂っていたここも、激しい激しい修行の果てに、
人の足で踏み固められたグラウンドと化しています。

「口寄せの印はわかっているな？」
久し振りに体中にチャクラをみなぎらせて、言うのは、おじいちゃん。

何故チャクラを張っているかというと、

口寄せというのは、通常、呼び寄せる生き物と、
血と術式で契約してから実行するもので、
未契約の状態で術を使うと、
別の場所に時空間移動してしまう恐れもあり、
もしもの時は他者のチャクラの干渉でなんとかそれを止めよう。
という魂胆です。

そうです、僕は夢の中での契約なので、
もしかしたら本当にただの夢なのかもしれないのです。

「準備おっけーだつてばよ！」

「いつでも大丈夫だ」

お互いに30m程距離をとり、万全の状態の、おじいちゃん、サスケくん、ナルトくん。

この3人が守ってくれるというなら、たとえ目隠しをして、手足の自由を奪っても、敵陣への突撃に恐れなんて要りません。

そこにあるのは、絶対の信頼です。

「じゃあ、いきます」

皆がゴクリと唾をのむ音が聞こえました。

「口寄せの術!」

ドカン!!

超が付くほどの大爆発に、僕は包まれました。

しかし、そこに熱も衝撃もありません。

だけれど、その音は、明らかに、

口寄せの術にふさわしいものではありませんでした。

煙がだんだんと晴れていきます。。。

そして目の前にあるのは。。

空へと伸びる、大きな、二つの、何か。

前？と思われるほうには、

それぞれ10本程の巨木程の何かがついています。

後ろは、丸みを帯びており、けれども鋼鉄のように硬そうです。

これは・・・

足・・・ですね。

そして視線を上にならげていくと・・・

3階建ての家屋程の、顔と思われる部分の、

一つが一楽の屋台程の大きさの、目？でしょうか、
あ。目が合いました。

「へあつ！！！！！！！！！！！」

爆音が、空気を大きく振動させて、響きました。

咄嗟に、口寄せを解除して、
残ったのは、口を大きく開けた男4人でした。

- * - * - * - * - * - * - * - * -

「何も見て無い何も見て無い何も見て無い」

これ以上おかしな出来事を頭に新規物件でいれたくないのでしょう。
おじいちゃんは頭をかかえてうずくまっています。

「.....」

この二人は、あからさまに引いていました。

どうせ僕っぽくないとか言うんでしょう。

いやいや、僕だってあんなの見たことも聞いたこともありませんよ。

「じゃあ、一つ一つ、意見を言いますよ」
勇気を出して、提案しました。

「大き過ぎだつては何だあれ」

「いや見たことねえし」

「ないない」

「人型？だつたてば」

「気持ちわりいな」

「あれは、喋ったのかのう？」

はあ、とため息が出てしまいます。

「あれと契約する人の気がしれないわ」

「そう思つてばよ」

「そうじゃのう」

「なんかかっこわりいし」

「赤と灰だつたつてばよ」

「ウルトラな色遣いじゃのう」

その後も止まらない悪口。

・

・

・

決めました。僕はあいつを愛します。

「口寄せの術！！！」

ドゥーン！！

再び爆音と共に登場。
これ修正出来ないかな・・・。

「へあ？」

くっ・・・戸惑っていやがる！・・・そうだよね！そうだよね！
満を持して登場して、強制退場だったんだもんね！
仕方ないよね！

「へあへあ・・・」

落ち込んでる・・・だと・・・
僕の気持ちが分かるんですか・・・

「へあッ！！！！！」

「うるせー！！返事は小さくー！！」

「へア」

「違う！何か違うけどまあいいやー！！」

あ、テレパシーなんて初体験で、思わず喋っていました。
んん？この気配はなんでしょう？

初めてです・・・。こんなに酷い視線を送られたのは・・・。
ヤバイ人を見る目って、こんな感じなんでしょうね・・・しくしく・・・

君！あの人達をこらしめてやってください！！

チユドン！！

・・・僕の光の攻撃みたいな、レーザーが、足の指のような部分から発射され、あからさまな視線を送る3人の、すこし手前あたり、彼らはものすごい勢いの衝撃で、後ろの木々へ飛んでいきました。

「ははは・・・」

笑う事しか出来ません。

「君、名前は？」

「へあッ！！」

「いや、分かりませんよ」

「へあッ！！??？」

・・・ねえこつやって、心読めるなら分かるんじゃないの？

(・・・大変失礼した。拙者ウルラマンでござる。

年齢は2万歳、趣味は読書でござる(

「ブツー!!!」(a a 略

ウルトラマンの目的

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

ウルトラマンとの対話は続いています。

「どうして、夢に出てきたの？」

(それが、色々あるでござる・・・。

一言で言えば、この世界の危機を察知して、拙者が送られてきたでござる！)

ははは・・・、まあた、面白くない冗談を・・・。

(いや、冗談じゃないでござる。

原因は、主、貴公でござる)

「え？」

なんだか心の中がザワザワし始めました。
こんな事今まで無かったのです。
なんでしよう、この感情は。

(貴公は、この世界の者でないでござるな?)

正直何を言ってるか、頭では全く理解できません。ですが、心の奥が何故かざわざわするのです。

(そうでござるう。)

おそらく、貴公には全く覚えがないはずでござる。(

ええ。

(たとえば、拙者を簡単に召還できる程の
人外の力を持つていたりする。違うでござるか?)

「確かに、あります・・・」
底の見えないチャクラ。

光になって飛べる。

そんな事、たとえ常識から遠く離れた忍の世界でさえ、
聞いた事がありません。

・・・あつ!

「ハ白い光」っていうのは、関係している・・・?」

(いかにも。)

「ハ白い光」とは、貴公の前世の、魂でござる。

高位の星から下位の星へと、

転生した為に、そこまで人外の力を得たのでござるう)

でも、でもどうしてそれがこの世界の崩壊へと繋がるのでしょうか？
僕にはさっぱり分かりません・・・。

（もう一人、^ハ黒い光^ヲを持った者が、
この世界に迷い込んでいるでござる）

えっ・・・？

（未来は、いつでも事が出来る。

それまで拙者は黙って貴公に力をお貸しいたそう。

後はご自分でお考えなされ。 念波OFF）

・・・ちよつとまだ頭が理解に追いつかないやあ・・・はは・・・

「いってー！なにすんだってばよー！」

怒ってる振りをして、

だけど顔には無邪気な笑顔をうかべる、ナルトくん。

あはは・・・。

とりあえず、今は、笑ってていいのかな？

きつと、^ハその時^ヲってというのは、

必然的に僕に牙を向くんだらう・・・。

「全く、規格外れのものと呼んだのう・・・。

大きさだけなら、あの蝦蟇よりもでかいかのう・・・。」

そうだ、僕には守りたい人がいる。

ウルトラマンの目的（後書き）

すみません少し短いですが><

感想ありがとうございます！

直ちに影響はry

以後気をつけます！！

中忍試験！

- * - * - * - * - * - * - * - * -

今日は、久し振りの第七班任務です。

「せんせえーっ！俺もうカカシ先生より強いってばよっ！！」
自信満々の顔で、拳を突き立てて、言うのはナルトくん。

「ははは・・・笑えない・・・」
結構本気で悩んでいるのが、カカシ先生。

今日から、おそらく高ランクの任務漬けの日々が始まります。
その中で、
「黒い光」との接点は見つけられるのでしょうか・・・？

とりあえず、久し振りに4人で集合した僕らは、
火影宅・・・つまり自宅へととんぼ返りしようと思いました。

その時、空を見上げたカカシ先生が、
そこに一羽の猛禽類が飛んでいるのを、視界にいれました。

「おっ、残念だが、今日は任務無しだ。
おめでとうとでも言うておくか？」

「じゃあ各自解散」

カラカラと笑って、颯爽と消えてしまった、カカシ先生。

「え〜どうなってるんだってばよ？」

困惑した様子の第七班です。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

「た〜、もうそんな時期かあ。」

左足に赤い印をつけたその鷹は下忍担当教官を呼び出す知らせ。
中忍試験の時期だ。

「うちのチームを出さない訳・・・がない。」

「そんな事したら、火影様に何されるか分かつちやもんじゃない。」

里の中央にある行政府の一室へと入っていった。

総勢五十名余りの忍が既に集まっていた。

「この里の核ともいえる集団ではないだろうか。」

「はたけ上忍、こちらへ。」

火影さま、これで全員揃いました。ごさいます。」

「うむ、」苦勞である」

そう言うと、勢い良く席から立ち上がり、告げた。

「本年の中忍試験の日程が決定した」

・・・はあ。

久し振りに、違う意味での緊張を味わって、なかなか疲れた。

推薦？勿論したさ。

中忍レベルじゃないしな、あいつらは。

ま、俺はその間お暇を頂いたって事でいいんかいな？
・・・ラッキー。

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

カカシ先生が疾風が如く消えていった事に、
しばらく呆然とする僕達です。

「んー・・・何事かなあ？」

3人で頭を捻るも、納得のいく答えは一向に出てくる気配がありません

せん。

修行に次ぐ修行で、脳みそまで筋肉に変わってしまったかと、少し心配になります。

「なんだってばよー、じゃあ今日は修行でもするってば?」

「あ、ごめん、今日は帰るね!」

「どうした?」

最近、白と外出していなかった事を思い出して、帰ろうとしました。

「いや、そのー・・・白と」

最後まで言い終える事は出来ませんでした。

「おっ、木の葉の忍びじゃん。

ちよっと柏木荘っていう宿を教えて欲しいじゃん?」

振り向くと、黒子衣装に歌舞伎役者のような隈取をした、真っ黒な頭巾と服をきた男が、少しニヤつきながら・・・。

「「「へ、変態だ〜!!!!!!」」」

平和な木の葉の里に、珍しく悲鳴が響きました・・・。

「ふんッ・・・なるほど・・・
・・・勘違いしてすまなかつたな」

一番クールな男を謝罪係りにさせて、なんとか許して貰いました。
なんでも、もうすぐ中忍試験が開催されるようで、
砂の下忍の代表として、
我愛羅くん、テマリさん、そしてへんた・・・カンクロウさん
の3人で木の葉に来ているようです。

「あれ、中忍試験あること知らなかつたじゃん？」

ナルトくんと同じぐらい髪の毛の明るいテマリさんが説明してくれました。
た。

開催国のハンデを失くす為に、

開催国は、ぎりぎりまでその日程を知らせてもらえないそうです。

「それで、宿を教えてくださいたいのですが・・・」
額ぬかに困こという文字を刺青？で入れている、
我愛羅くんが、丁寧ていねいに聞いてきました。

「あ、そうでしたね、

確かこちらにあつたと思います」

つられて、丁寧語で返してしまいました。

「おー！助かったじゃん！」

おまえらも下忍じゃん？じゃあ試験会場で会おうじゃん！」

「どうも兄がご迷惑をおかけしました・・・」

「じゃねー」

3人、それぞれ異なった反応をして、

彼らは宿に入っていききました。

「おおっと！いけない！じゃあナルトくん、サスケくん！
僕はこれで！」

白とお買い物でも行こうかな、とか思いつつ、
そう言って光になって、家へ飛びました。

「今の、瞬身の術じゃないじゃん？早すぎじゃん？」

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

中忍試験！（2）

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

それから何度かカレンダーを捲って・・。

今日は中忍試験の日です。
担当の上忍の推薦制らしいんですけど、やっぱり推薦されていました。

受け取った地図を手に取り、
その地図に従って、描かれた建物に入ります。

階段を上がり・・

「なあなあ、どうして幻術かけてるってばよ？」
ナルトくんが純粹に疑問を口にしました。

「多分これも試験なんだと思うよ？」

「ふんっ・・こんなアカデミー生徒ですら引っかかる訳・・

何人かの、木の葉の下忍と思われる人たちが、
ハッという顔をしていました。

「ふんっ・・・まじか・・・」

何人かが殺気に向けた視線を送りましたが、サスケ君に睨み返されると、すぐに階段を上がっていきました。

「ねえ、階段上がるって、幻術とけてないよね、あの人たち」

ドタバタドタバタ！と階段を駆け下りて、

「「「「解！」「」「」」

・・・下忍で経験をつんでください・・・。

廊下を歩いていくと、壁際に、試験官の人と思われる人が立っていました。

「あ、通ります」

そう言つて、僕は試験官の人の後ろに、幻術で隠れていた階段を登っていきました。

大きな重たい扉を開けて、試験会場と思われるに入ると、
もう多くの受験生の姿がありました。

同級生の姿は・・・あ、居ました！

「ナルトくん、あそこあそこ」

「ん・・・？お、おーい！

シカマル！キバ！久し振りだつてばよ！！」

会場中の視線がこちらに向きました。

さすがナルトくん、とんでもないタフガイです。

アカデミー時代の、旧友と挨拶をかわしていると・・・、

「お、我愛羅くんたちだ」

向こうもこちらに気付いたみたいで、向かってきます。

「その節はどうも・・・」

「いえいえ、困った時はお互い様ですよ」

社交辞令な挨拶を交わす、僕と我愛羅くん。

ナルトくんとテマリさんが、顔を見合わせて笑っています。
あれ？普通でしよう・・・。

「ところで、聞きましたか？」

「一次試験は、ペーパー試験だそうですよ」

「あ、そうなの？」

「…ってええ！困ったなあ…」

「あはは、実は私達もなかなかどうして、ペーパー試験なんて出るとは…」

「だよー」

僕・我愛羅くん好きです！！
話し方も丁寧だし、目が綺麗だ！

「ほら、そろそろ席につくじゃん？」

カンクロウさんが、二人をつれて席へ戻っていきました。

「ふんっ…それにしてもトロそうな奴らしかいないな…」

サスケくんが毒を吐くと、付近に居た年上の人たちが
すごい勢いで睨みをきかせてきました。

サスケくんが睨み返すとry

ふと、後ろに気配を感じて、振り向くと、
ビックリした顔の、優しい顔をしてメガネを掛けた人が立っ
ています。

「よ…よく気付いたね」

「え、あ、どうも。
猿飛ボルです、こんにちわ」

僕は、一瞬この人の目が光ったのを、見逃しませんでした。

「ああ、君がボルくんか。

僕の名前は薬師カブト。見ての通り木の葉の下忍さ」

「随分年上だつてばよ、そんなに弱いつてば？」

ブツとサスケくんが噴出しました。

ナルトくんの無神経さは、尊敬に値します。

でも、僕はどうしてもこの人に引つかかるものがあるので、

笑いつつも、しっかりと警戒を続けていましたが、
特にボ口を出す事もなく、その場は流れました。

そして・・・、

「待たせたな！」

忍びというよりも、レスラーのような、

「中忍試験第一の試験を担当する森乃イビキだ！！」

イビキさんが、豪快に、リングインです！！

- * - * - * - * - * - * - * - * - * -

中忍試験！（2）（後書き）

短めでごまんなさい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9763w/>

木の葉の平和な意志

2011年9月28日04時48分発行